

平成 30 年度 第 2 回磐田市総合教育会議 会議録

日 時 : 平成 31 年 2 月 20 日 (水) 午後 3 時 30 分から午後 5 時 00 分まで

会 場 : 磐田市役所 西庁舎 3 階 特別会議室

出席者 : 市長、教育長、青島美子委員、秋元富敏委員、鈴木好美委員 (出席者 5 名)

事務局 : 企画部長
教育部長
秘書政策課 (課長、課長補佐、政策・行革推進グループ担当)
教育総務課 (課長、児童青少年政策室長、総務グループ長)

傍聴者 : なし

【会議次第】

1. 開 会

2. 市長あいさつ

3. 協 議 事 項

(1) 平成 30 年度の振り返りと今後の磐田の教育について

(2) その他

4. 閉 会

[協議の主な内容]

- 市長 本日は「平成 30 年度の振り返りと今後の磐田の教育について」をテーマに、感じていることや提案など、忌憚のないご意見をいただきたい。
- 委員 教育委員になって「地域とのつながりが大切だ」ということを学び、「地域」や「地域が子どもを育てる」ということについて考えながら、学校の連絡協議会などに参加させていただいた。地域の方は、自分たちの地域の子どもを大切に思ってくれている一方で、それに煩わしさを感じている親が多いという実情を知り、互いの思いにギャップがあり、難しさを感じた。
- 今年 1 年は「生まれてから 18 歳までをどうするか」をテーマに話し合ってきた中で、私が特に感じているのは、15 歳までに子育ての大切さを学んでほしいということ。「青少年健全育成大会」で紹介された、中学生の「赤ちゃん抱っこ」の取組みのように、子どもたち自身が子育ての大切さを実感しないと、子どもを「産みたい」「育てたい」と思える大人にならないと思うので、義務教育の間にそう思ってもらえるようにしたい。
- 委員 視察に行った世田谷区の「新 BOP」という学童保育システムが、とても勉強になった。そこでは、校庭や校内の一部の施設を使い、子どもたちが中心となって、学習や外遊びなどをしており、夢中になって遊んだりしている子どもたちの顔つきが本当に輝いて見えた。投力や走力、身体の使い方など、こうした遊びの中から得たものが体力テスト等にも反映してくると思う。この取組みは、磐田でも必ずできるだろうし、やるべきだと思う。
- また、今年度から、定例教育委員会で、議題以外にフリートークの時間を設けていただいたことで、教員多忙化の実情や視察先の取組み、幼保再編に係る幼稚園の民営化のことなど、気になっている話題について意見交換ができ、とても有意義な時間となった。
- あとは、学校運営協議会について気になった点がある。地域の有識者や地区のボランティア活動をしている方、PTA や子ども会の会長などで構成される協議会では、経験を踏まえた様々な意見が出るが、保護者などの若い方たちは、ほとんど発言できていなかった。子育て世代の若い方たちが、もう少し自由に発言できるような会全体の雰囲気づくりや方向づけが必要ではないかと感じた。
- 委員 先日、竜洋西小学校での道徳教育の授業を見学した。その授業では、航空自衛官、旅行の添乗員、新聞記者、調理師という異なる職業に就く 4 名の方を講師に招き、それぞれの仕事での経験を「磐田の教育」道しるべに結びつけて話してくれて、とても感動した。
- 例えば、航空自衛官の方は、自己完結能力という言葉を使いながら“勤労・勤勉を喜びとすること”につながる話、旅行の添乗員の方は、修学旅行中のトラブル対応に奔走したときの生徒たちとのやり取りから、“感謝の気持ちは「ありがとう」と素直に伝えること”に結びつけた話だった。こういうものが「生きた教育」だと感じた。英語教育なども大切だが、子どもたちのこれからの人生において、最も基礎となるのは道徳だと

思う。どのように生きるか、どうやって生きていくべきか、それを義務教育の間にしっかり身に付けてほしい。こうした授業は、今後も続けていただきたい。

教育長

今年1年を振り返ると、事件や事故があり、その中で、子どもたちの「生きる」ということへの認識が薄れてきていることが気になった。実際に、「生きる」ことをリセットできると考えている子どもがいて、中学生でさえ「いのち」という認識が薄い。本来は、親と子の触れ合いの中で、「生きる」ことを認識し、「いのち」という感覚を身に付けさせないといけない。そのためには、親や教員が、子どもたちに根気強く、しっかりと接していくことが大切である。

また、脳の発達と生活習慣の関連についても考えていく必要があると感じている。某テレビ番組で人間の脳の退化を取り上げ、ある大学教授が、18歳まではスマートフォンの使用を規制した方が良いと言っていた。脳の発達が止められる、特に前頭葉が疲れ、創造性や社会性などの働きに影響するとのことである。私たちの仕事は、パソコンを使うことが多く、パソコンの画面を見ていると仕事をしている感覚になるが、実は、そこから入ってくる情報が前頭葉を疲れさせている。これからの現代人は、よほど注意しないと創造性を発揮できる脳が蝕まれていく。私は、「毎日の生活に忙しく、日常性に埋没することなく、自らの生を生きていくことが大切だ」というフレーズをよく使うが、これからは、もう一度、人間とスマートフォンなどの情報機器との関係を捉え直し、注意深く対応していかなければいけないと思う。

市長

昔は、頑張っている家族の姿を見たり、生活のために手伝いをしたりすることで、感謝の気持ち、体力、基礎知識などが自然と身に付いた。豊かな時代になり、そういうものが消えてしまっているように思う。学校では勉強さえしていれば、家庭や社会が個々を磨いてくれたが、それも徐々に希薄になってきているなかで、これからは、学校現場でどう育てていくかを考える必要がある。今は国の各省庁が、何かあるとすぐに県を通して市町に下ろしてくるが、文科省があり、県教育委員会がある中で、何のために基礎自治体に教育委員会があるのかということ、原点に戻って考え直さないといけない。さりとて、これは磐田でやっていくみたいな形の決め方も法律の範囲内で十分可能である。各論で決めると、親御さんから賛否両論あるだろうけど、それが教育だと思う。生きていけば、常に不安や危険はある。今は貧しい時代ではないが、格差は広がり、親の感覚にも差が出ている。こうした中で、磐田の子どもたちの生きる力、自立、そういうものを15歳までに育て、たくましい若者として世に送り出すためにはどうすべきか、考えがあれば伺いたい。

委員

以前、幼稚園に携わっていたとき、週1回、出版関係の人と本について勉強する会を持っていて、「性」に関する絵本を勉強したことがある。現在、小中学校で読み聞かせをしているが、読み聞かせの場でその本を読むべきかどうか、今でもすごく迷っている。性教育については、中学校でもほとんどやらないと思うが、大事なことなので、生きることや命の大切さとの関連性も含め、義務教育の間に勉強する機会が必要だと思う。

委員 スポーツ少年団での経験から、言葉遣いが気になる子や自己中心的な子、嫌なことをすぐに顔に出す子などが増えているように感じる。友達を傷つけるようなことを簡単に言ったり、相手がこちらを見ていない状況で物を投げて渡したりと、全く気持ちが入っていない。家庭でも普通にやっているのだと思う。これは家庭教育の部分に踏み込まなければいけない話で、お母さん方から相談を受けたとき、「絵本の読み聞かせをしているか？」と聞いても、している方が少ない。子どもの頃に伝記を読んで「将来こんな人になりたい」と思った記憶があるので、小学生に「伝記を読むか？」と聞いても、あまり読んでいない。今の子どもたちは、そういうことに触れる機会が少ないように思うが、やったほうが良いと考えているので、何とか啓発できないかと感じている。

あとは、安心安全の面で課題はあると思うが、昔のように、子どもたちだけでも自由に遊べるような外遊びの場をなんとか確保してあげたい。

委員 視察した「新BOP」方式を磐田市で導入できないか。今の放課後児童クラブでは、時間を有効に使えていないように感じる。この時間を使って、例えば、外遊びや活け花、百人一首大会などができるのではないかと。地域には、それぞれ得意な分野を持っている人がいるだろうし、そういう人たちを巻き込めば可能だと思う。お茶や琴などの日本の伝統文化を教えたり、身に付けさせたりするのも良い。本来は、家に帰らせて、洗濯物を畳んだり、お米を研いだり、家のことをさせるのが良いと思うが、そういう時代ではないのなら、身になることに時間を使える環境を整えてあげるべきだと思う。

市長 視察先の取組みは、磐田市でも実現は可能か。

教育長 できると思うが、人員が必要となる。現在、放課後児童クラブでは、国からの指示どおり、1クラス2人の支援員を配置しているが、「新BOP」では、そこに元教員の方を1人加え、その方を中心として、大学生などを雇い、子どもと一緒に遊ばせている。そこで、昔の遊びや体験活動など、テレビゲーム等に頼らない遊びを工夫しながらやっていた。

今の放課後児童クラブに、メンバーを加えて遊びをコーディネートする。例えば、子どもの体験的な活動を取り入れる。そういうことが可能だと思う。

委員 視察先では校長先生だった方が加わっていたが、安心安全や支援員・大学生たちのフォローなどの面からも、教育に携わったことがある人が1人いるということが重要なポイントだと感じた。

市長 放課後児童クラブは支援員が集まりにくい状況で、教育経験者を50人近く揃えるのは大変なことだが、本当に大事だと思えば、他を見直してでもやるべきだ。今は時代の大きな境目であることを意識していない人もいるので抵抗もあると思う。だから、市内32校の見える化を図ることが大切で、見える化をすれば地域の協力が得られるし、親御さんたちも真剣になってくれる。その1つとして「にこっと」を設置し、子ども若者相談センターを立ち上げる。特に、これからの時代は教育委員会と学校現場が鍵を握っ

ていると思う。例えば「赤ちゃん抱っこ」は全ての学校に広まっていないが、自由な教育の原理があるとしても、本当に大事なら全中学校区でやるという感覚を持ってほしい。その中で「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」では、市の教育委員会で決めた方針は守らなければならないと明確になっている。この法律は合議制なので、意見を述べても、なること、ならないことはあるが、結論は大事にしなければいけない。せめてカリキュラムが許す中で、「この時間にはこれを」というものがあれば、是非やってほしい。そういう思いで、本音で語り合ってほしい。何かやろうとすると反対意見も出るだろうけど、本当に大事だったら、耐えてでもやり抜くという信念が必要だと思う。

教育長

ここで話し合ったことは政策にすることもできるし、「こうしなさい」と指示すれば学校は意欲的に動いてくれる。しかし、それぞれの学校に独自の教育課程があり、その中で保護者や地域と話し合いながら進んでいる状況である。「ウェルカム赤ちゃん」も、各地域で話し合い、現在は8校で実施しているように、少しずつ広げていくことが大切だと思う。

また、人として育つためには自然体験や遊びの体験が必要である。例えば、「にこっと」では、子どもたちの夢とロマンの体験の集積である絵本の世界を感じることができて素晴らしいと思う。あとは「新BOP」のような外遊びを含む体験的な教育課程を、地域の方とも協力して磐田市ならではの形で作っていきたい。そのためには、人員さえ増やせば良いということではなく、スタッフには、ある程度の市からの支援が必要だと思う。学府一体校が「人と人とのつながり」を1つのテーマにしているように、地域の方と、どれだけ一緒に作っていけるかが大きなポイントになる。

市長

市長就任以降の10年間は社会の変化が激しく、連日のようにDVや虐待など、信じられないような事件が報道されている。結局、親になってはいけない、まだ幼稚な子どもたちが親になっているようなところがあるのかもしれない。

私は、親から「挨拶しなさい」とか「ありがとう」と言いなさいとかはよく言われたが、性のことを教わった記憶はないし、学校でも「一時の感情でそういう行為に及ぶと、一番困るのは女の子だから責任を持って行動しなさい」と言われたぐらいの記憶しかない。伝え方は単純だったが、それでも男性が女性に手をあげるなんてとんでもないことだと強く認識できた。

教育長

最近では、何でも理論的に論破しようという傾向があるが、駄目なことは「駄目」とはっきり言うのは大事なことで、その単純さは必要だと思う。性教育については、どうやって子どもができるかという話も含めて、保健体育の授業で男女別にやっている。最初にその話をするのが修学旅行へ行く前で、小学校の5年生の時。ただし、昔と違って、スマートフォンや携帯電話、SNS、インターネットの影響が大きく、指導している内容よりも、子どもの知識の方が、はるかに進んでいる場合がある。先生が話をすると、笑うところでもないのに、笑い始めたりする。そんな状況なので、その辺の捉え方も含めて話をしていけないといけない。

- 委員 最近の変化として感じているのは、病院に連れていったり、保育園の送迎をしたり、卒園式・卒業式に出席したりと、子育てに参加するお父さんが増えていることで、とても良いことだと思う。その裏で、働くお母さんが増えて、時間的な余裕がなく、子育てに時間をかけられないという家庭も増えているように感じる。
- 市長 昔と比べると親は優しくなったし、今の子どもは大切に育てられていると思う。だけど、今が悪いわけではないのに、先ばかり見て、自分で勝手に不安を作り、焦っているところがある。だから、稼がなきゃとか、働かなきゃとか、必要ないのに保育園に申し込んでおこなきゃとなる。最近、モラルとか躾、節度、そういうものが欠如していることが多いように感じる。これは他人事ではないということを、どう啓発していくべきか。例えば、1日1善のような磐田市の運動、学校現場で先生が大切なことを言い続けること等、いろいろなことを搦め手でやっていく必要があると思う。
- 事務局 委員から視察の話が出たが、教育部の検証でも、今の放課後児童クラブのやり方には限界が来ているという認識がある。「新BOP」方式は、都会でも、子どもたちが生き生きと遊んだり学んだりできる場が提供されているという点で、参考になる取組みである。そのまま取り入れることは出来ないが、例えば、人員については、クラブの規模を大きくしたり、エリア分けしたりすることで、教育経験者を49人集めなくても効率的に配置できるかもしれない。本日の意見は、児童クラブで過ごす子どもたちの時間の質を高めようという趣旨だと捉えているので、磐田の児童クラブでは、こういう空間でこんな時間を過ごせるといった強みをつくり、体験が出来て、暑いとか痛いとか、そういうことが分かる子どもを育てていきたいと思う。様々な課題を整理しながら実現可能な方法を検討していきたい。
- 市長 磐田でやれるかどうかより、本当に必要ならばやる、やれる方法を考える。モデル事業としてやってみることもできる。無理だと諦めるのではなく、いろいろな角度から考えて、優先順位はこれだと思ったらやるべきだ。これからの教育現場、教育委員会、市役所行政にはこのぐらいの感覚が必要だと思う。

※新BOPとは

子育て環境への支援とともに、子どもの居場所を確保し、自由な遊びや体験・交流の場や仕組みを充実させ、子どもの健全育成を図るための世田谷区の取組みで、「学童クラブ（放課後児童クラブ）」と「BOP（Base Of Playing：遊びの基地）」を統合したもの。